高尾山報 令和4年10月号 毎月1回発行 通巻第705号

高尾山報

令和4年10月号

南大沢・八王子交通安全協会主催

高尾山 交通安全祈願祭厳修

九月十七日 於・自動車祈祷殿大広場

法の水茎 (124)

大正大学講師　髙橋秀城

すみのぼる
心や空を
払ふらん
雲の塵ゐぬ
秋の夜の月

（『金葉集』源俊頼朝臣）

（澄み渡って昇っていく心が、空を清めているのだろうか。雲一つない秋の夜の月よ）

九月の中秋の名月はご覧になりましたでしょうか。明るい夜空を見上げると、大きな満月が閑かに照り輝いていました。次の日は少し曇っていましたが、少し欠けたように見える十六夜の月が、雲間でやわらかな光を纏っていたのにも心惹かれるものがありました。

早いものであれから一ヶ月。今月は「後の月」とも呼ばれる十三夜がめぐってきます（今年は十月八日）。十五夜に次いで名高い十三夜は、月の左側がほんの少し欠けています。徐々に深まりゆく秋の装いを感じつつ眺めれば、きっと心の中の塵も払われて、清らかな心持ちになっているでしょう。

真言宗を開かれた弘法大師空海（七七四～八三五）もまた、自然の中に身を置いて、さまざまな苦行に励まれました。土佐国（今の高知県）の室生門崎（室戸岬）では、修行中に明星（金星）が口に飛び込んできたとの話が伝わっていますが、その折の心境を、次のような和歌に残されています。

法性の
室戸といへど
我がすめば
有為の浪風
よせぬ日ぞなき

（『新勅撰集』弘法大師）

（安らかな悟りを思い浮かべる室戸と聞いていたけれど、私が住んでみると、つらい無常の波風が立たない日はないよ）

この歌は、勅撰集にも入集した著名な空海歌です。はじめの「法性」とは「悟りの世界」を表し、それは果てしなく広がる「法性の空」や、限りなく深い「法性の海」にも喩えられます。「空」と「海」の双方を合わせ持った「空海」というお名前には、真実のありのままの姿である「法性」の教えが込められているのかもしれません。

第二句「室戸」には、地名の「室戸岬」とともに、「無漏土」という「煩悩などの悩みごとのない地」が掛けられています。「法性無漏」（真理に煩悩のけがれはない）という仏教語があるように、室戸岬は清らかな土地として空海の目に映っていたのでしょう。

ただ下の句では、いざその場に立ってみると、心がざわつくような波風が毎日のように押し寄せてくると詠っています。普通であれば「室戸」（無漏土）の名の通り、心が穏やかに静まっていくように思うのですが何故なのでしょうか。

やや難しくなるかもしれませんが、例えば鎌倉時代の真言僧侶、頼瑜僧正（一二一六～一三〇四）は、この空海の歌に応じる形で、次のような歌を唱和しています。

性海の
縁起は今ぞ
知られぬる
無漏土のうらの
有為の浪風

（『真俗雑記』頼瑜僧正）

（悟りの心を弘法大師の歌によって今知ったよ。真実の裏にある無常の波風ということを）

なかなか訳すのが難解な歌です。はじめの「性海」とは、先ほどの「法性の海」のように真実の世界を海に喩えた「真理そのもの」を表しています。仏教語「性海縁起」は、「仏の悟りの境地を言葉に出して説く」という意味になりますが、頼瑜は空海の歌によって、悟りとはどのようなものかを知ることができたと詠っているのでしょう。

では、具体的に何を知ったのでしょうか。それは下の句にある「無漏土のうらの有為の浪風」にあると思われます。空海歌と同様に「無漏土」には「室戸岬」、「うら」には室戸岬の「浦」と表裏の「裏」が掛けられています。さらには心を表す「うら（心）」が響かされているかもしれません。

頼瑜は、空海の歌から「悟りの内には煩悩がある」という真理を感じ取ったのではないでしょうか。室戸岬に「住み」、心を「澄ませる」ことによって、はじめて無常（有為）の波風

室戸岬で修行する
弘法大師空海
（絵・橋本豊治）

八王子車人形国重要無形民俗文化財指定を祝う会

於・京王プラザホテル八王子　九月十日

九月十日、日本遺産「霊気満山　高尾山」の構成文化財の一つ「八王子車人形」が、**国重要無形民俗文化財**に指定されたことをお披露目する祝賀会が行われました。

八王子車人形を継承する西川古柳座は江戸時代末期に誕生し、今では国内のみならず海外でも公演されております。また佐藤貫首が、八王子車人形後援会の会長を務めるなど髙尾山とも大変御縁が深く、毎年節分会などに参加されます。

西川古柳座の皆様におかれましては、これからも伝統を次世代へと継承していき、更なるご活躍をお祈り申し上げます。

祝福の舞「三番叟」が披露された

八王子車人形
五代目家元
西川古柳氏

が身にしみた歌と解釈したようです。苦行の末に知り得た空海の思いは、和歌によっても後世の弟子たちの心を奮い立たせたようです。

さて先月号では、『今昔物語集』の空海伝から、苦行によって多くの奇瑞（不思議な現象）をあらわし、密教の世界に分け入って、名前を「教海」から「如空」、そして「空海」へと改めたところまで読み進めました。その後はどのような道を辿られたのでしょうか。

空海は、仏様の御前で真言密教への真っ直ぐな求道心を打ち明けました。するとその後、夢の中に人が現れ、「ここに『大毘盧遮那経』という経がある。これこそお前が必要としている経典である」と告げられました。

目覚めて嬉しく思い、夢で見た経典を探し歩くと、大和国（今の奈良県）高市郡にある久米寺の東塔の下で、この経典を見つけました。喜びさっそく開いてみましたが、難しくてなかなか理解できません。すると「この国には知っている者はいない。私は唐（中国）に渡って、この教えを学ぼう」と思い立ち、延暦二十三年（八〇四）の五月十二日、時に空海三十一歳の年に唐へと渡ったのでした。

海の道を進むこと三千里（約一万二千キロ弱）。ようやく蘇州というところに到着しました。その年の八月には福州に行き、十二月下旬には首都長安に至りました。都では、この一行を一目見ようとする人々が、道に溢れかえっていました。

住まいの寺院に移り住み、しばらくしてついに青竜寺東塔院の恵果阿闍梨にお会いすることができました。

（『今昔物語集』など）

ここに見える『大毘盧遮那経』とは、密教の根本経典『大日経』のことです。遥か海を渡っての遠い道のりは、密教の淵源を遡る求法の旅でもあったでしょう。密教を究めたとして、東アジア各地から弟子が集っていた恵果阿闍梨（七四六～八〇五）に巡り会えたのも、空海の一途な思いによる、出会うべくして出会えた法縁だったように思われます。

（栃木北部教区普濟寺）

当山貫首 宗機顧問会出席

八月二十五日、佐藤貫首は総本山智積院において開催された智山派の宗務運営について議論するため、宗機顧問会に出席致しました。

当日は智積院において大勢の僧侶の出迎えを受けて午後一時に登領し、布施浄慧管長猊下と面会された後、奥書院に移動され、午後二時より宗機顧問会に臨まれました。

高尾交通安全協会主催 交通安全祈願火のまつり厳修

於・高尾山自動車祈祷殿大広場（九月十日）

交通安全を一心に祈る佐藤貫首

不動院から祈祷殿までの練行

挨拶をする高尾交通安全協会小松会長

高尾山への入り口となる
交差点で行われたお祓い

事故ゼロを願い火中に撫木を投ずる

無事に過ごせますように…

南大沢・八王子交通安全協会主催 高尾山交通安全祈願祭厳修

於・高尾山自動車祈祷殿大広場（九月十七日）

勇壮に火を渡る佐藤貫首

山伏を出迎える南大沢・八王子
交通安全協会の皆様

火を渡りお加持を授かる

南大沢交通安全協会の田中会長（左）
八王子交通安全協会の小杉会長

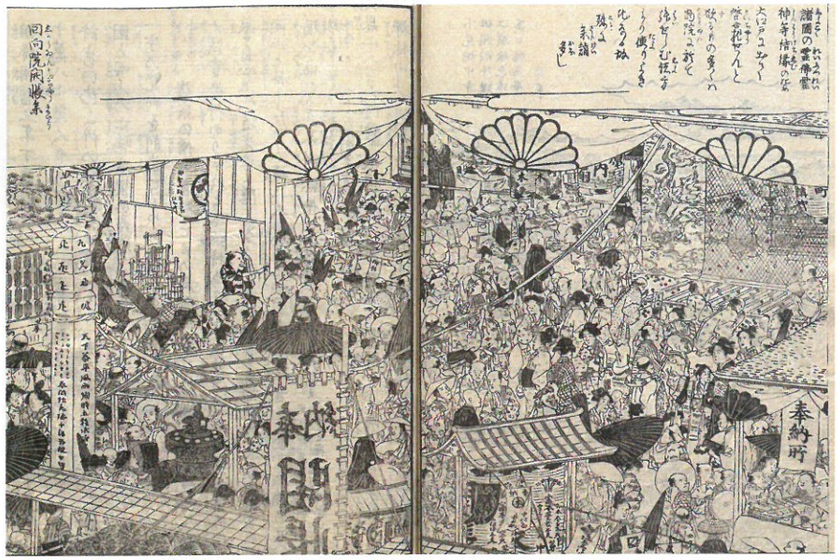
巨大な火柱となった浄火が宵闇を照らす柴燈大護摩供が厳修された

高尾山年代記 34

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館　外山　徹

十六世秀憲2　開帳の執行



両国回向院における開帳場の様子
（『江戸名所図会』から　国立公文書館デジタルアーカイブ）

享保一六年（一七三一）の二月三〇日。新暦では四月上旬と、すでに日差しも暖かい。この日から飯縄宮落慶供養の居開帳が始まった。三月一五日には近隣の旧家の日記に「さてさておびただしき高尾参詣にござそうろう」と記される活況を呈することになる。

享保一六年の居開帳

さて、開帳とは文字通り帳を開くこと、すなわち普段は閉じられている堂宇や厨子の扉を開け、期日を限って本尊を直に拝礼できる機会を設ける祭事である。判明している高尾山における最も古い事例は天正四年（一五七六）となる。実施時期における史料を欠くが、前年秋に北条氏照が発給した乱暴狼藉を禁ずる制札が現存している。

寛政二年（一七九〇）の出開帳願いに先例として記された元禄一七年（一七〇四）の居開帳も同時代の史料を欠くが、この年の江戸での集中的な永代護摩檀家発生という別事象の記事と合わせると、開帳へ江戸から参詣した者が檀家になったという筋立てが考えられる。前々年の常法談所（僧侶の学問所）復興という寺勢拡張の動向を考えても開帳実施は現実味がある。そして、享保九年の一五世賢秀の時の開帳は同時代の史料に裏付けられ、この頃からは開帳その他の祭事の執行がたびたび確認できるようになる。

享保一六年の開帳は、旧家の日記の記事から、地先上椚田村の人々がどのように関与したかがよくわかる。「村中高尾へ道造りに上り申しそうろう」と、二月一七日に村人らが総出で登山して道普請をしている。もちろん、半月後の開帳にともなう参詣者の通行を見込んでのことだろう。そして、二月晦日の開白に際して「高尾へ登る、御振舞いなり」というのは、先の道普請をはじめ、開帳執行にあたって村人に協力を求める趣旨だろうが、飯縄宮建立以来の村人との協働という意味でも、祝祭感のあふれる様子が浮かぶ。

日記の主は三月八日夜に高尾山へ登り一〇日まで滞在しているが、後日の記事から宮番をしていたことが判明する。月末の二九日から翌月三日まで再び泊まり込みにて宮番を務めているが、二日の記事には「さてさてこの日など開帳盛り申しそうろう」とある。まさに大勢の人々で賑わう様子を目の当たりにしての記述である。さらには、四月七日から一〇日、二三日から二八日と、二ヶ月間に延べ一七日間、山内に詰めていた。

四月三〇日の閉帳には日記の主も立ち会っており、片付けにも従事したものか。そして、五月三日には再び「高尾へ振舞いに登る」の記事。六月七日には「この日薬王院様開帳のお礼に御出で」と山主秀憲が直々に村へ出向いており、二三日には「この日高尾より心龍坊開帳の礼に音物御持御出なられそうろう」とある。心龍はこの時点で弟子僧の筆頭である。「音物」とは贈答の品。度重なる謝意の表明からは、開帳が成功裏に終わり高尾山飯縄大権現の存在を世に知らしめたことに対する秀憲の満ち足りた心境を想像することができる。

翌々享保一八年の三月二一日には旧家の日記に「おびただしき高尾参り」と記される。宗祖弘法大師の御影供である。この様子は日記の主が高尾山を訪れて直接見聞したものか、伝聞したことか、参詣の道筋で大勢の通行を目にしたことかは判然としないが、「おびただしき」という表現からは、飯縄宮建立を機に高尾山信仰が著しい興隆を見せたことが伝わってくる。

興隆する高尾山信仰

享保二一年には「高尾山開帳始め（二月二八日）」「飯縄大権現・薬師如来ならびに末社とも惣開帳」と、再び大がかりな開帳が執行された。やはり、二月一六日に高尾山で振舞いがあったので、四年前と同じような協力態勢だったのだろう。日記の主はこの時も三月一九・二〇日、四月八・九日と高尾山に詰めており、開帳は四月二八日に閉帳した。

この開帳で注目されるのはその最中の三月二八日、紀伊徳川家当主宗直が帰国の途次に身延山へ参詣するため、甲州道中を通行していることである。江戸中後期に高尾山の大檀越であった紀伊徳川家との関係がどのように始まったか、全く知る手がかりはないが、この、居開帳の最中に通行が重なった事実は注目される。それ以上のことは全く仮定と想像上のことになってしまうが、先述来の「おびただしき高尾参詣」という賑わいがあれば、それがどのような理由であるか宗直の耳にも入ったであろう。そこに人々の信心を集める神仏が存在することが強く印象付けられたのではあるまいか。

同年元文に改元。翌二年の七月二一日には「この日高尾山へ弁天様江戸納□申しそうろう、二五日まで□□にて開帳（□は虫損による判読不明箇所）」と、やや文意が明瞭ではないが、大略江戸の者から寄進された弁財天の祠を披露したとのことである。高尾山信仰の盛行が江戸へ波及していることが印象付けられる。現在、有喜閣の裏手に福徳弁財天が祭祀されているが、江戸期においては清滝前の池のほとりに弁財天の祠があった。

初めての江戸出開帳

そして、来る元文三年（一七三八）は、年々高揚する高尾山信仰をうけ、いよいよ江戸出開帳を執行する年となった。

寛政二年の願い書には、先例として本所大徳院大仏勧化所にて四月一日から、六月一～二〇日の日延べも含め八〇日間の出開帳をおこなった旨が記されている。大徳院は出開帳のメッカである両国回向院の南に隣接し、名称からも地方の寺院が交互に出開帳をおこなう場所だったのだろう。

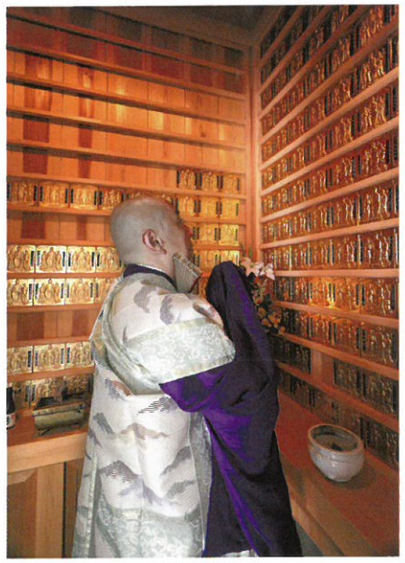
寛政二年の別の書面は、江戸鎌倉川岸町内が出開帳の世話に任じたことを記している。鎌倉川岸（鎌倉町・東京都千代田区）は、現在では鎌倉橋の地名で知られる一帯で、神田川から荷の積み下ろしをする河岸場として、徳川家康の江戸入り以来の経済的中枢であった。何分、この頃の江戸とのつながりは検証の材料に乏しく、鎌倉川岸との間にいかなる縁があったかは不明であるが、出開帳にあたっては開帳場の設営や諸手続きに莫大な物入りがあるため経済的な援助者の存在は不可欠であった。一定程度、江戸での信徒基盤の構築がなされていなければ成し得ないことなので、史料上には管見されないものの、享保の信仰興隆によって、江戸にも相当数の信徒が存在するようになっていたのだろう。

さて、薬王院文書では半世紀後の記述によるのだが、この出開帳は、先の旧家の日記に記され同時代の史料によって裏付けられている。「この日飯縄様江戸へ開帳に御出、八王子まで送り（三月二二日）」「高尾山江戸よりお帰り、飯縄の迎え出（六月二八日）」と、日記の主は本尊の見送りと出迎えにあたっている。二九日からは麓にて開帳が始まり、翌七月九日には振舞いを受けているので、この江戸出開帳にも地元の人々の協力があり、また、秀憲もその絆を大切にしていたことがわかる。

おことわり　本連載では史料の引用について、適宜、読みやすく原文に手を加えています。

お釈迦様との尊い御縁を願って
仏舎利奉安塔懸仏総供養法要厳修（九月六日）

佐藤貫首による回向文奉読



懸仏を懇ろに供養する

仏舎利が納められた塔内を参拝する

結縁牌懸仏新規奉納者御芳名

久慈市　梅林恵理子
〃　梅林　翔
八王子市　早川清次郎
川越市　橘　國雄
相模原市　大野眞佐子
八王子市　田邉隆一郎
足利市　田野　榮一
三鷹市　原田　正三
八王子市　弓立　昭彦
（順不同・敬称略）

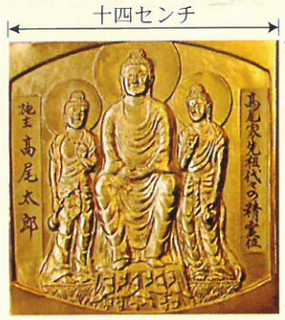
高尾山仏舎利塔
結縁牌懸仏（かけぼとけ）のおすすめ

高尾山にはタイ王国・王室より授けられた、大聖釈尊の真身骨を奉安している仏舎利塔があります。そしてその周りを囲むように建立された百観音お砂踏霊場がございます。

御信徒各位には、釈尊との御勝縁を結ばれますよう、仏舎利塔内に結縁牌懸仏（かけぼとけ）をご納仏されることをお勧め申し上げます。

この結縁牌懸仏は、夫々（それぞれ）のご家族の先祖代々供養の為に、あるいは講中、参拝団の物故者慰霊の為に、お釈迦様と御信徒の皆様との尊いご結縁のしるしとして、霊名あるいは施主のご芳名を刻み、仏舎利塔内壁面に奉安し、大聖釈尊の聖骨と共に幾久しく供養されるものであります。

御納仏冥加料
一体　拾万円也



尚、お申し込みの方には「御納仏回向之証」をお授け致します。（左の写真）

高尾山の昆虫
ツクツクボウシ

156

盛夏を謳歌するかの、耳にこびりついた蝉時雨も九月の声を聞くと、さすがに静かになり、夏の終わりを感じさせます。

その中で他のセミからバトンタッチを受けたように晩夏に個体数が増え、十月になってもその鳴き声を耳にすることがあるのが、ツクツクボウシ（つくつく法師）です。

虫の中にはその姿を見ると、夏の終わりを感じさせる種が少なからず存在しますが、本種はその独特の鳴き声で去りゆく夏を感じさせます。

セミはその鳴き声で、ミンミンゼミとかニイニイゼミとか和名が付くことが多いですが、本種はオーシィ、ツクツクツク、オーシンツクと独特の旋律で、しかも鳴き方が変わったり、テンポが早くなったりは珍しいことではありません。

独特な鳴き声からツクツクボウシというユニークな和名が付けられ、他のセミとは間違えることはありません。

寒蝉とか秋を告げる蝉とか呼ばれるように、哀愁のある鳴き声が晩夏に響きます。

時期により本種の大合唱になりますが、気配に敏感で他のセミのようにその姿を目にするのは容易ではなく、声はすれども姿は見えずの典型的なセミと言えます。

（文 松島　孝　撮影 上村　雅昭）

観音菩薩の宗教 ㊺

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

観音菩薩の転生者としての聖徳太子 ～太子と空海(4)～（その21）

前号で引いた『高野大師行状圖畫』第四「大師上宮御廟恭詣事」の解説をしよう。弘法大師が河内の叡福寺の聖徳太子廟を参詣したさいの述懐である。

弘法大師が聖徳太子のために法要を勤修していたさい、夜更けにいたって聞こえてきた『大般若』の「理趣分」とは、玄奘が漢訳した『大般若波羅蜜多経（略して大般若経）』第十会「般若理趣分」のことをいう。『大般若経』は漢訳で六百巻にも及ぶ浩瀚な経典で、『大般若経』『二万五千頌般若経』『金剛般若経』などに相当する経典を含んでおり、それぞれを第一会、第二会などのように「会」と分けている。このうち第十会「般若理趣分」は、真言宗寺院で多くの機会に読誦する不空訳の『般若理趣経（略して理趣経）』に相当する。「理趣分」は禅宗でも読誦されるが、『理趣経』とともに真言密教の代表的経典である。

夜更けに聞こえたその声が誰のものか弘法大師が「我に示し給へ」と祈ると、「我は救世観音の垂迹なり」と答えたという。その「垂迹」は衆生を救うためにこの世に来て、仏敵である物部守屋を滅ぼしたり四十六の寺院を建てたりし、さらには『勝鬘経』の注釈を著したなどとあるから、聖徳太子であることは明らかである。その聖徳太子の声を聞くことによって、弘法大師が「第三の発光地」を得たということは、仏の功徳を通じて両者が密接に通じ合っていることを示している。仏教の言葉でいえば感応あるいは感応道交である。「大師上宮御廟恭詣事」のこの一節は、両者の感応を説いたものと捉えることができる。

また、室町時代に編纂された辞典の『塵添壒嚢鈔』巻十七には、大師の太子廟参詣について次のようにある（中川前掲論文、三三七頁）。

「嵯峨天皇の御宇。弘仁元年。大師河内の國靈處に。道場を立て籠り居給ひしか。百ケ日をかきりて聖徳太子の御廟にまふて給ひぬ。其九十六日と云ける夜。御廟の前にて。懇に法施し給ひし。いと夜更て後。大般若の理趣分を誦する者有（中略）此微妙の聲は。誰人のなす處そや。願くハ我に示し給へとありしかは。廟窟の前に光明を現しつゝ。光りの中に聲有て云く。我は救世觀音の垂迹也」

これによれば、弘法大師は聖徳太子廟に道場を建てて、そこに百日籠って「法施」したという。聖徳太子の唱える「理趣分」を聞いたのは、「その九十六日」目の夜であるとする。中川善教（前掲論文、三三八頁）は、検討の結果、「満数を以て示せる百箇日の前日第九十九日が正し」いとし、あるいは「九十六と云ふ數に特殊の意味でもあるのであらうか」とするが、いずれにせよ、この記述から見えるのは、長日に亙って太子に供養を捧げる弘法大師の熱烈な聖徳太子信仰である。

聖徳太子の感応により三地の菩薩となった弘法大師は、『高野大師行状圖畫』第十「住吉同體事」において空海・住吉明神の同体説が開陳されるにいたる（中川前掲論文、三三八～三三九頁）。その所説を引用し、順を追って解説していこう。

高尾山薬王院における国家安穏を祈る大般若経転読会

「傳へきく大師ハ第三地の菩薩。高貴徳王菩薩となり。我朝に誕生して。三密をひろめ。國家を利し遂に高野の勝地をしめて。金剛定に入。龍花の下生を期す。ふしきなりくと云々。住吉明神の御本地、高貴徳王菩薩也。高野の大師と同躰也と云事聖主の勅語仰くへし、貴むへし」

現代日本語への拙訳を掲げる。

「伝え聞くところによると、弘法大師は第三地の菩薩である高貴徳王菩薩となって我が日本に誕生して、三密をひろめ、国家に利益を与え、遂に高野の適切な土地を所有して、ゆるぎない涅槃に入って弥勒菩薩がこの世に降臨するのを待っている。不思議なことだ、不思議なことだ、などなど。住吉明神のご本地は高貴徳王菩薩である。（高貴徳王菩薩と）高野の弘法大師とが同体であるという天皇のお言葉は仰ぎ尊ばなければならない」

上記に見える高貴徳王菩薩は複数の経典に現れるが、ことに『大般涅槃経』巻二十四「光明遍照高貴徳王菩薩品」の所説が詳しい。この菩薩は、観音菩薩や地蔵菩薩のように尊崇の対象になることがほとんどないが、弘法大師とは深い関係を有している。『大般涅槃経』における高貴徳王菩薩は、ブッダ釈尊の対告主として登場する。対告主とは、教主すなわち説法者の聞き役をいう。そこにおいて高貴徳王菩薩は、『大般涅槃経』の中心思想である「一切衆生悉有仏性」をブッダから聞き、さとりを得たとされる。

引用した「住吉同體事」では、弘法大師が高貴徳王菩薩として日本に生を享け、三密を広めたとされる。三密とは密教の基本思想で、身・口・意の三つをいう。密教行者は身（手）に印を結び、口に真言を唱え、意で仏菩薩を観想して自己と宇宙の一体化を目指す。弘法大師が「三密をひろめ」とあるのは、日本に密教をもたらし弘めたことを指す。その上で国家に利益を与え、高野山に寺院を建て、今なお坐禅したまま弥勒菩薩がこの世に降臨するのを待っているとする。

弥勒菩薩はブッダが現在仏であるのに対し、五十六億七千万年後に兜率天より降りてくる未来仏である。原文にある「龍花」とは未来に弥勒菩薩が弥勒仏となって龍華樹のもとで三回説法するという信仰を指す。そのため、龍華三会ともいう。弘法大師は凡夫の如く死んで無となったのではなく、今もなお禅定（坐禅）したまま弥勒菩薩の降臨を待っていると信ぜられている。このゆるがぬ禅定を金剛定という。高野山の奥の院で維那と呼ばれる仕侍僧が毎日、朝夕、衣服と食事を上げ下げするのはそのためである。弥勒信仰によれば、遠き未来に弥勒仏が降りてくるのを弥勒下生といい、逆に衆生が兜率天に往生して弥勒菩薩に会いに行くことを弥勒上生という。弘法大師は下生を待っていることになる。そのことを「ふしきなりくと」と述べている。

河内の高貴寺の縁起によれば、弘法大師は弘仁年間に当時、香華寺と呼ばれたこの寺を参詣し、密教の修法中に高貴徳王菩薩を感得したという。その後、寺名を高貴寺と改称したと伝えられる。「住吉同體事」の所伝と併せ、弘法大師と高貴徳王菩薩との深い関係を示すできごとである。また、『涅槃経』などは高貴徳王菩薩の称号として「光明遍照」を伝えているが、弘法大師自身も唐に留学中、師の恵果阿闍梨より金剛名号として「遍照金剛」を授かっている。金剛名号とは、真言行者が灌頂を受けたさいに師から授与される名号である。高貴徳王菩薩、弘法大師ともに「遍照」を有することも、両者のつながりを示唆している。

次に「住吉同體事」は「住吉明神の御本地は高貴徳王菩薩なり」と説く。『古事記』によれば、伊邪那岐命は先にみまかった妹にして妻の伊邪那美命を死者の国たる黄泉国より連れ戻そうとして、死穢を清める禊を行なった。そのさい生まれたのが底筒之男神・中筒之男神・上筒之男神の三神、総称して住吉三神という。ここでは住吉の神は高貴徳王菩薩が垂迹したものと説き、弘法大師と結びつけていく。詳しくは次号で述べよう。

秋彼岸先師墓地参り

九月二十三日

高尾山物語 54

飯縄権現堂

絵・橋本豊治

史料に残る飯縄権現堂の姿

「飯綱大権現の宮有り、大社にして最も壮麗なり」
『高尾山・石老山記』・一八二七

「神威赫々と顕われ実に輪奐たる様の社頭なり」
『八王子名勝志』・一八四九

大本堂脇の階段を上り鳥居をくぐると、御本尊飯縄大権現様がお祀りされている。飯縄権現堂(御本社)に至ります。

江戸時代後期の史料には、その荘厳さを称える言葉が残されており、幾度かの補修が行われ、現代にも丹塗りの社殿や、彩色豊かな彫刻が伝わっております。

社殿は一見すると、一つの建物に見えますが、手前から拝殿、幣殿、本殿の三棟が連結した「権現造り」という形式をとっております。

本殿は江戸時代中期の享保十一年(一七二八)に建立されました。当時に建立主、十六世秀憲が晋山主、十六世秀憲が晋山間もない頃、山麓の上椚田村の人々と一体となって築き上げたと伝わります。翌年には拝殿、幣殿が併設されました。

その後、宝暦三年(一七五三)及び文化元年(一八〇四)頃の修築を経て、概ね現在の姿となったと考えられております。

いろは天狗の落し文 ㉑

な

何でも軌道
乗せ切るまでは
慎重に
慎重に

物事を始める時というものは、ただ思い付きそのままに行うのではなく、事前に検討を重ね、確かな根拠をもって行う必要があります。

はじめのうちは熱意があり、どんなことにでも慎重に取り組むものですが、二度、三度と繰り返すにつれて慣れて行くと、その慎重さを失ってしまいます。失敗が起こり易いのは、まさにこの時期です。

「つい」「ふと」「うっかり」気を抜いてしまうこともありますが、その先にどんな失敗があるか分かりません。これから一層も気を引き締めていきましょう。

おはなし散歩道

アライくん

町田市　大澤桃代

山から村を狙うものがある。猪だとアライくんが言う。夜、村外れの畑でオレたちは待ち伏せる。

ドドドドドド……足音が近づいてくる。

温暖で豊かな村だが、人が減るにつれて、野生動物の害が増えた。ここで踏ん張らないと、畑も田んぼもやられてしまう。

何とかしよう、と言ったのはアライくんだ。

「ここはいい村だ。ずっと、ここに住みたい」と。

アライくんは秋口に村にやってきて、よろず屋で燻製を盗み、オレたちに捕まった。話してみたら粗暴者ではなく、ただの腹ペコ野郎で、可愛い目をしていた。町育ちのせいか、きれい好きで器用で物知りだった。

「アライくん」と呼び名が決まり、オレと村長とよろず屋の仲間に入れた。

オレの家が「小山田」だと知っていたし、村長とよろず屋のことも承知していた。

アライくんの提案で、オレんちの畑の以前仕掛けた罠を直すことにした。収穫時期で大人は忙しく、ほとんどが年寄りなので頼りにならない。

「みんなは触るな！」

アライくんは言って、器用に罠を直す。猪が踏むとワイヤーが足に食い込む罠だ。獣道に二つ、柵の内の畑に一つ仕掛け、土や落ち葉で覆った。倒れた畑の柵も立て直した。

備えは万全だった。

ドドドドドド……

音が大きくなる。

オレたちは争いを好まない。たぶんアライくんも。上手く罠に掛かってくれ、と祈った。

ドドン、ドドン、続けて振動が起こる。罠にかかったのだろうか。

——やった！

猪は臆病だからこれで諦めてくれるかもしれない。ホッとしてアライくんを見ると、眉をひそめて柵をにらんでいる。

あっ！　と思う間に大きな猪が柵を超えた。

オレは固まる。村長とよろず屋も動けない。

ギャアーッ！　と大きな音がした。それがアライくんの雄叫びだとわかったのは、猪に体当たりした姿を見たときだった。

——無茶だ！

オレは震える。

猪は、オレたちの潜む草むらをめざし、真っ直ぐ走ってきたのだ。

ドシン、ドシン！

と、地面が揺れる。

アライくんが組み伏せられている。猪にかなうわけがない。ただ、無事を願うしかない。

——もう、だめだ……。

そう思ったとたん、猪がのけぞり、目から血を流して倒れた。その足には罠がある。アライくんが体を張って罠に誘導し、爪で目を引っかいたのだ。

ヒーン、ヒーン、と、罠にかかった猪が、情けない声を上げている。

アライくんが戻ってきた。体が血と泥だらけだ。

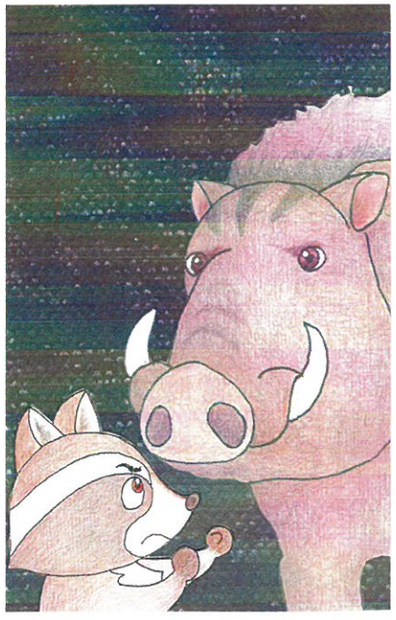
「やっつけたんだけど」と、彼のつぶらな瞳が輝く。やっぱり可愛い。

「猪どうすればいいの？」

「大丈夫だよ」

オレは村の方を見やる。思った通り、騒ぎを聞きつけた村人がぞろぞろとやってくる。猪の始末は村人にお任せだ。

「アライくんは、隠れていた方がいい」



彼がうなずく。

「ボクは外来種のおたずねものだからね」と。

村人たちは口々に勝手なことを言ってる。

「猪がかかってるが」

「小山田さんちの罠が残ってたんだ。よかったよ」

「この畑は村の砦だで」

「おや、狸が三匹いるぜ」

「村長さんとよろず屋さん、小山田さんの家のだ」

「狸が罠仕掛けたって？」

「ねえな、それは」

村人たちが笑う。

アライグマのアライくんは、オレんち、つまり小山田の家の縁の下に向かって、縞模様の尻尾を振り振り歩いて行った。

（挿し絵・小出　茂）

■健康登山者投稿作品■

季節の絵手紙「もっと良い明日に」

八王子市　栃谷玲子 様

高尾山 季節散歩

暦の言葉　「七十二候」

楓蔦黄
「もみじつたきばむ」

十一月二日～十一月六日頃

「楓」と書いて「もみじ」と読みます。「もみじ」は一般に木々が色づくことを指す場合と、高尾山にも多く自生する「イロハモミジ」を指す場合があります。

高尾山では例年十一月下旬になると全山が色付きます。

今月の風物詩

秋の味覚

「食欲の秋」、「実りの秋」という言葉がある通り、秋は旬を迎える食材が多く、食べ物をおいしくいただける季節です。

柿やぶどう、梨などの代表的な果物の他、松茸や秋刀魚、かぼちゃなど、秋の味覚を存分に使ったお料理などを楽しんでみてはいかがでしょうか。ただし、食べすぎには御用心です。

一歩一歩煩悩滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

七段　他人の意見に流されない

多くの人は他人の目を気にするあまり、自分の意見よりも周囲の意見を受け入れてしまいがちです。「空気が読める」ことは大事ですが、物事の判断基準を他人に任せきりにするのではなく、自分で決めることを心掛けてみましょう。

七五三身上安全祈願

「七五三」とは、皆様方の可愛いお子様が、これから健康にすくすく育ちます様にと、身上安全の願いを込めて寺社にお参りするという行事です。

高尾山でも御本尊・飯縄大権現様の御加護を願い、毎年多くのお子様がお参りに訪れております。十月～十一月の間、山上「御護摩受付所」にて、「七五三祝い子育て祈祷」を受け付けております。

どうぞ皆様で御来山なされますよう、ご案内申し上げます。

武蔵野三十三観音霊場巡礼

秋遊五庵山金乗院

深愛球員歓呼狂
一挙一動少女忙
自然湧出結婚望
紅雲陽照棒球場

厚木市　荒井　一雄

憧れの
選手の走り登れるを
追い掛け登り境内に捕ふ

秋、五庵山金乗院に遊ぶ

意中の選手を熱狂的に応援…
一挙手一投足に恋する
少女は忙がし…
自然と結婚願望が
湧き出づる…
あかね雲を透かせて夕陽は
野球場を照らし出す…

お詫びとお知らせ

「一歩一歩煩悩滅除」の掲載につきまして、第七段を飛ばして掲載しておりました。今号に七段を掲載致しますので、来月号は十段となります。

茲に謹んでお詫び申し上げます。

いけばなの心 32

華道教授　佐藤　宗明

花材：ソケイ、ツルウメモドキ、カトレア - カーニバルキッズ -

今回は前回もご紹介しました、生花新風体の作品です。

黄緑色～緑色の葉がついている枝物はソケイという植物です。ソケイはジャスミンの仲間で花が咲くと白や黄色の花が咲きます。花屋さんではあまりみかけないと思いますがいけばなのお稽古ではよく使われます。

今回は素晴らしいソケイが手に入ったので、その枝ぶりを生かして作品を制作しました。秋の風情をより強調するためにツルウメモドキを添え、カトレアで作品に華やかさを醸し出しています。花器はソケイの枝に負けないように重く、重厚感のある物を合わせてみました。

人事異動（九月二十一日付）

執事	深田	洋平
法務部長	上村	公昭
法務部次長	桑名	善光
教務課長	杉山	宗聖
信徒部付参事	佐藤	伸二

高尾山報助成金志納者御芳名（順不同・敬称略）

小平市　関　道雄
古河市　中山　春夫
狭山市　富田　衛
八千代市　稲越　眞
秩父市　上原　幸江
新座市　彰山　粧麗
大和市　上野　勝子
富里市　森　照森
八王子市　佐藤　光
武蔵野市　金子　満
駒ケ根市　田中　重明
秩父郡　内海　容一
八王子市　峯尾　正彦
藤岡市　吉村　幸一
鴻巣市　島﨑　榮一郎
川口市　八木橋　弘子
鹿沼市　松本　俊夫
葛飾区　濱口　大明
狭山市　根岸　由洋
八王子市　天野　章雄
高尾山健康登山者一同

訂正とお詫び

九月号十八ページ上に掲載いたしました『高尾山報助成金志納者御芳名』にて、お名前に誤りがございました。

（正）東松山市　根岸　裕基
（誤）東松山市　根峯　裕基

茲に謹んでお詫び申し上げ、訂正致します。

登山だより

■十一月行事日程

一日～七日
聖天秘供（聖天堂）

十二日、二十四日
弁天様御縁日

一日、十五日
御詠歌勉強会
（十時山麓不動院）

八日
仏舎利詣り（仏舎利塔）

二十六日
月例写経会
（十三時山麓不動院）

二十七日
高尾山とんとんむかし
「語り部の会」
（十二時半山麓不動院）

二十八日
奥之院開扉供養
（十時奥之院）

二十一日
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供
（九時大本堂）

☆神徳報謝百味飲食供
高尾山御本尊飯縄大権現様の日々の御加護に感謝し、沢山の御供物を捧げて御本尊様威光倍増の為、御供養申し上げる法要です。
皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は大本堂までお申し出下さい。尚、法要終了後に百味のお札を授与致します。

毎月二十一日午前九時勤修
御志納金　一口三千円以上

毎日のお護摩奉修時間
（4月15日～10月31日まで）

午前5時30分
〃　9時30分
〃　11時00分

午後0時30分
〃　2時00分
〃　3時30分

ご講中・団体等御相談下さい。

秋の特別精進料理「もみじ膳」のお知らせ

本年も毎年ご好評を頂いております、秋の味覚を楽しむ特別精進料理「もみじ膳」を実施致します。大広間でのお食事となり、ご予約無しでお召し上がり頂けます。食材に限りがありますので早めの来山をおすすめ致します。

期　間　十月十一日(火)～十二月九日(金)

特別精進料理「もみじ膳」　2,900円（11:00より受付開始）

※営業日の詳細につきましては、ホームページをご覧頂くか、お電話にてお問い合わせ下さい。※料理の内容は季節や仕入れにより変わります。

◆お知らせ

高尾山薬王院では、新型コロナウイルスの感染予防を図る為、境内各所への消毒液設置・換気・職員のマスク着用などの対策を実施しております。
御来山の皆さまにおかれましても、手洗いや咳エチケット等の予防対策情報に十分留意されますようお願い申し上げます。

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号　193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人　犬山秀康
編集人　菅井倫浩
印刷　ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円

高尾山薬王院ホームページ
https://www.takaosan.or.jp
下記のQRコードから高尾山薬王院のホームページにアクセスできます